

はじめに

外間, 守善

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

1

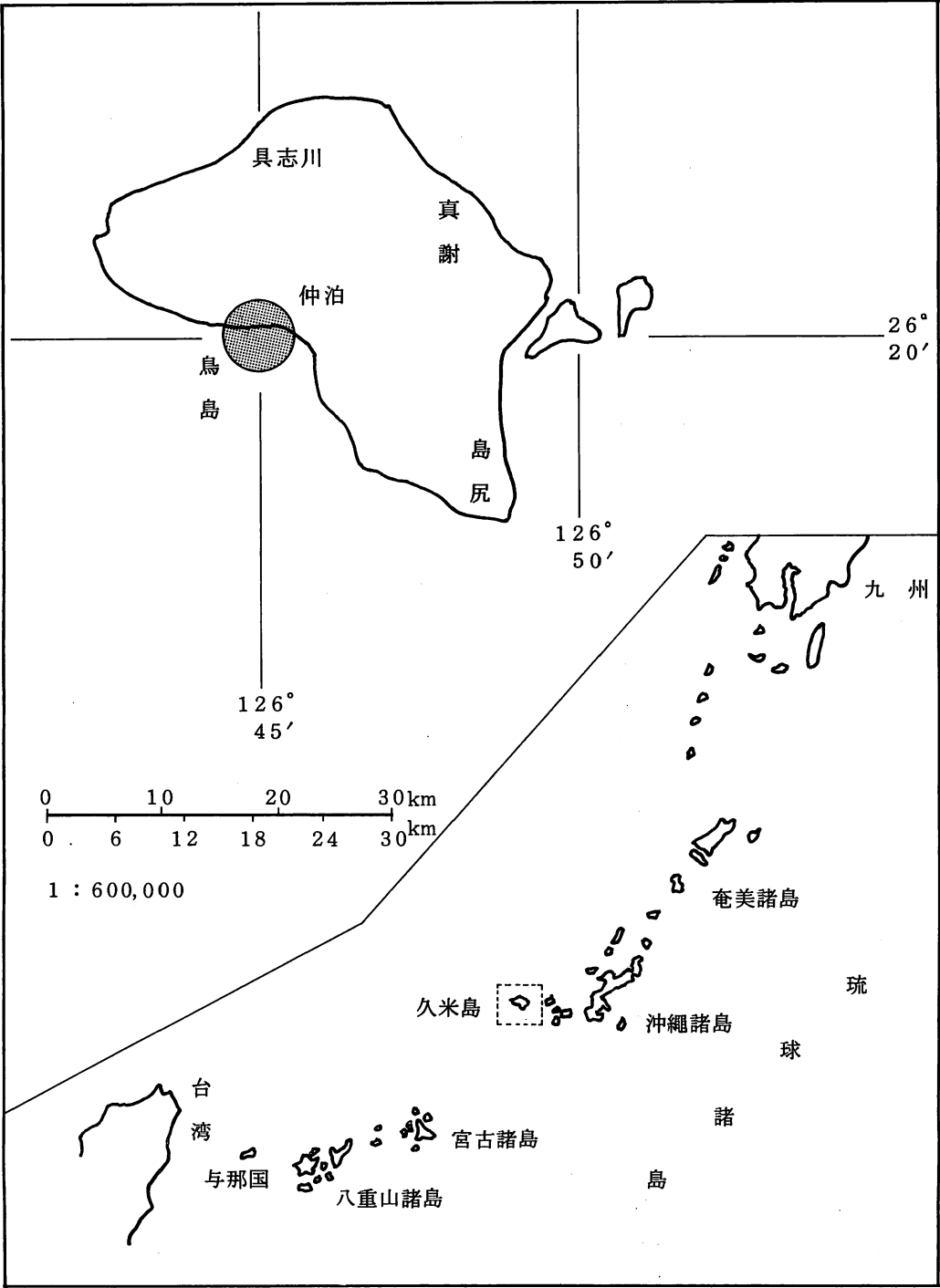
(終了ページ / End Page)

3

(発行年 / Year)

1981-03-20

久米島具志川村鳥島地点図



は じ め に

琉球方言は日本語の中にあつて本土方言とは異なる特徴をもっている言語である。その特異性を生み出した要因として、島嶼という地理的条件をあげることができる。すなわち南海の島嶼には本土におこつた時代ごとの言語変動の影響がそのまま伝播していかなかったために、本土における歴史的な言語変化の波からはずれてしまった面をもっている。たとえば、本土では、はやくに失われたハ行P音や、室町末期に起つた活用語の連体形と終止形の同化作用という大変動や、係り結び法の消失など、これらは、中央語における歴史的な言語変化の現象としてあげることができるが、この現象は、本土のあらゆる方言をまき込んでいった。ところが琉球方言では本土のように中央語の歴史的な言語変化の波をかぶらずに、これらの古形をいまだにとどめ、あわせて多くの古語もよく保存していて、その特異性をあらわしている。

古い相もさることながら、いま一つは、島嶼という条件によって、琉球方言の内部において新しい個別の言語変化が深化していったためにその特異性をさらに深めていっていることである。無気喉頭化音と有気非喉頭化音との対立、宮古方言の f, v の発生などがそれである。

このように、古い相と新しい相をもつ琉球方言は、奄美、沖縄、宮古、八重山、与那国の諸方言の特徴を生み出し、これらはさらに小方言に分化し、島ごと、集落ごとの方言にまで細分されているのである。これは、あたかも日本語の変化の可能な限りの方向性を示しているかのようでもある。このような小方言を生んだ琉球方言の諸変化は、本土方言では観察できない多くの言語現象の観察を可能にしてくれる。これらの現象を比較検討することによって、琉球方言の変化過程をあとづけることが可能であり、ひいては日本語の変化過程の全体像をえがくことも可能となるだろう。そのための現存する諸方言の資料を整えることが急がれる。

日本語の一分枝として存在している琉球方言は、いま、試練の時機に直面している。すなわち、交通機関の発達によって島嶼という条件は克服されつつあり、また、マスコミの発達によって琉球方言の特異性も失われつつある。これは、工業化・情報化社会における必然的な趨勢とはいえ、大いなる文化遺産の消失を意味するものであり、文化的に貴重な資料が失われることになる。

このような状況にあつて、法政大学沖縄文化研究所では、琉球方言の実態をできるだけ広範囲にわたって収集し、少しでも多くの言語資料を後世に残していくことを責務の一つと考えるものである。

琉球方言の資料を収集するにあたって、次のような計画を立てた。

- (1) 奄美諸島から与那国島にいたる琉球全域の言語実態を、地理的にも、言語的にも、できるだけ広範囲にわたって記述する。
- (2) 調査は、年に一地点に限定し、その地点の言語現象をできるだけ多く記述し、年々その成果を積み重ねていき、ある時期にこれらを集大成する。

- (3) 調査では、臨地してその方言を簡略音声記号で表記収集し、できるだけ分析しない生の言語資料を得るようにする。
- (4) 調査は、外間守善・屋比久浩・中本正智・内間直仁・野原三義・加治工真市の所員・研究員および任意による参加者が適宜担当する。多くの方の参加を歓迎する。
- (5) 1年ごとの調査結果をまとめる。

昭和54年度の調査対象地点は、久米島具志川村鳥島である。久米島の鳥島は、奄美諸島の硫黄島（徳之島の西方70キロ、北緯27度51分、東経128度14分に位置し、面積217ヘクタール周囲8キロの火山島）からの移住集落である。硫黄島は硫黄の産地であったが、明治36年4月の大爆発により、同島での生活が困難となり、そこで明治36年12月および翌37年2月の2回にわたって、久米島具志川村への移住がなされたようである。鳥島と仲泊は、道路ひとつへだてて近接する集落でありながら、両者の方言は明らかに異なる。

調査は、12月中旬から下旬にかけて行なった。調査にあたっては、久志川村教育委員会の上江洲仁清教育長、吉里智享課長、上江洲泰夫主事をはじめ、宮里正光氏およびその他の方々に大変お世話になった。

鳥島の方言を教えてくださいました方々は次の通りである。

国 吉 朝 勝 区 長	(64歳)
国 吉 文 市 氏	(58歳)
国 吉 昌 光 氏	(69歳)
国 吉 ゴゼイ 氏	(女・70歳)

特に、国吉朝勝区長には、話者の紹介その他で大変お世話になった。

以上の方々に心からお礼申し上げますとともに、また今回の調査にご協力いただいた久米島の方々に深く感謝申し上げます。

今回の現地調査と資料整理およびその執筆は

語 彙	中 本 正 智
文 法	内 間 直 仁
	野 原 三 義

のように分担した。

論説としては、「日本語の代名詞の体系―自他の二極関係構造」（内間）が寄せられた。

法政大学沖縄文化研究所
所 長 外 間 守 善